

『Norah』-ノラ-

【Scene.1】ホノラの祠

ホノラは走っていました。
百年の森林(もり)の中を、奥地へ向かって。

樹齢50年のトチノキの根っこをくぐり、
大岩の影にある洞窟を抜けて、ホノラは走っていきます。

大きな滝の裏にある通路を抜けて、
サルトリイバラの茂みをかき分けると、
そこは、ちょうど猫1匹が通れるトンネル。

薄暗い一本道を抜けると、
小さな祠のある広場に出ました。

そこは、ホノラだけの、秘密の場所。

「ここまで来れば、もう大丈夫だろう。
なんとか、うまくいった。

この世界は奪うか、奪われるか。
多く獲ったやつが偉いんだ。誰にも渡すもんか。」

ホノラは、どこかからくすねてきた
サンドイッチを手に持っています。

周りに誰も居ないことを確かめると、
急いで食べはじめました。

【Scene.2】ホノラとマフラー

ホノラはノラ猫です。
一年中、マフラーを巻いています。

ホノラが物心ついたとき、
そばにあったのは、このマフラーだけでした。

小さなホノラは、弱い存在。

たくさん、痛い目にあいました。
たくさんのものを、奪われました。

まっすぐに生きていくためには、
強くならなければなりません。

たくさん、戦いました。
たくさん、傷つきました。

強くなりたかったけど、
小さなホノラは、強くなることが、できませんでした。

そのうちに、
ホノラは立ち向かうことを、やめました。

何を言われても、
へらへらと笑っていることにしました。

誰かが残した余り物を、
ずる賢く、盗むようになりました。

でも本当は、
そんなこと、したくなかったのです。

ただ、まっすぐに、
誰も傷つけずに、生きていたかっただけなのです。

ホノラは“ノラ”として生きることが、
嫌で嫌で、仕方ありませんでした。

【Scene.3】猫たちの秘密の場所

ここは、百年の森林(もり)にある、
猫たちの秘密の場所です。

毎日「猫集会」が開かれます。

お調子もののミャオが、
誰彼かまわず話しかけています。

「ねえねえ、知ってる？
ダルガ峰の頂上に、とんでもなく美味しい実をつける木があるんだって！
でも、まだ誰もたどりつけてないんだ。

はじめて採ってきたやつはヒーロー間違いなし！
なあ、行ってみなよ！

エレノアも“食べてみたい”って言ってたよ！」

エレノアは美しい白猫です。
みんながエレノアに夢中です。

でも誰が告白をしても、
エレノアは「いやよ。」と短い返事。
首を横にふるばかりでした。

ホノラも密かに、
エレノアのことを想っています。
でも、誰にも言ったことはありません。

チラッとエレノアの方を見たものの、
足元に目を落としてしまいました。

「いや、いいよ。
食べ物なんて、お腹がふくれれば何でもいいんだ。」

「つまらないやつ。
まあ今回も、ジョーンズが採って来るんだらうな。」

ジョーンズは、乱暴者のボス猫です。

「おう、ホノラ！お前も一緒に行くか？
なんてな。
こんな辛気臭いやつと一緒にいたら、
目的地に着く前にカビだらけになっちまうぜ。
ハハハ！安心しろよ、オレが採ってきてやるからよ！」

ホノラはただ、あいまいな笑い顔を浮かべて、
その言葉を聞いているだけでした。

ホノラはヒーローになんて、なりたくないのです。
ただ穏やかに、暮らしていきたいだけなのです。

「おい、なんとか言ったらどうなんだよ！弱虫ホノラ！」

ドンっ！

ジョーンズがホノラの肩を強く押しました。

ホノラは何か言いたかったけれど、
言葉が喉につかえて、うまく出てきません。

ホノラはジョーンズに背を向けると、
トボトボと祠へ帰って行きました。

【Scene.4】冒険家のネズミ

祠に戻ると、何やら見慣れない姿が見えます。

「お前、誰だ！」

返事がありません。どうやらネズミのようです。
祠の前で目をつぶっています。

「おい...！」

「うるさいな！ちょっと黙っていてくれ。
いま、お祈りしてるんだよ！」

「へ？お祈り...？」

ふと見ると、祠には、
花と木の実がお供えされています。

しばらくすると、
ネズミが振り返って言いました。

「そう、お祈りだよ。
“今日も食べ物にありつけますように”って祈ってるんだ。」

ぐ～。

ネズミのお腹が大きな音で鳴りました。

「お前、お腹すいてるんだろ？
それ、食べたらいんじゃないか。」

「いや、これは僕の分じゃないんだ。森に返す分さ。
自分の分を多くとりすぎてしまったら、誰かが食べ物に困るだろう？」

「そんなことに何の意味があるのさ？
祈ったって、お腹は膨れない。
目に見えるもの、手で触れるものが全てだろう？」

「そうかなあ。」

たしかに今、この木の実を食べれば
僕のお腹はいっぱいになる。

でも、自然への感謝を忘れたら、
明日、明後日、1年後に
食べ物が採れなくなるかもしれないじゃないか。

今を生き延びたって、
未来に死んでしまったら、意味がない。」

「未来のことを考えて、いま死んでしまったら、
それこそ無意味じゃないか！

僕にはさっぱりわからないよ。」

【Scene.5】“ノラ”で生きること

ネズミは、名を「マッフィー」と言いました。
ちょっと変わった、冒険家のネズミです。

世界中を冒険して、
ワクワクする物語を書いています。

ホノラはマッフィーに尋ねました。

「なあ“ノラ”で生きるのは、ただでさえ大変だろう。
何でわざわざ、“冒険”なんていう危ないことをするんだ？」

「僕の友達に変わったネズミが居てね。

彼から、“詩”や、“見えないもの”、
“ワクワクする気持ち”の大切さを教わったんだ。

“目に見えないもの”で、たしかにお腹は膨れない。
でも、心はそれで満たされるんだよ。

だから、僕は冒険をするんだ。
仲間たちにワクワクする冒険の話をするために！」

マッフィーの目は希望に満ちて、
キラキラと輝いています。

ホノラはたまらずに、呟きました。

「なあ、君は“ノラ”で居ることを何とも思わないの？
こんなに惨めで、苦しくて、寂しい暮らし。
嫌になっちゃうよな…。」

「僕は、そうは思わないな。
“ノラ”での暮らしは、楽しいし、自由で、気ままだ。」

「え…。」

「“どこに居るか”は重要じゃないんだよ。
自分が“どう在るか”が大事なんだ。

自分の在り方次第で、世界は楽しくも悲しくもなる。
僕はノラで生きること、誇りを持っているよ。」

【Scene.6】とてつもなく美味しい実

それから毎日、
マッフィーはホノラの祠に来て、
お祈りをするようになりました。

マッフィーが話す冒険の話は、面白くて、
ホノラも、それを聞いている間は本当に、
心がワクワクして熱くなるのです。

ある日、
猫集会から帰ってきたホノラがマッフィーに言いました。

「なあマッフィー、
“とんでもなく美味しい木の実”って知ってるかい？」

「いや、聞いたことないな。どんな実なんだい？」

「ダルガ峰の頂上にあるっていう木に、成る実なんだってさ。
まだ誰も、たどり着いた者は居ないらしい。」

「まだ、誰も...！なんてワクワクする話なんだ！
行こう！まだ誰も食べたことのない実を、手にいれようよ！」

「え。いや。でも...。
あのジョーンズたちでさえ、逃げ帰ってきたって。」

「乱暴者のジョーンズだって、
たどり着けなかったところに、
僕と君がたどり着いたら？」

それこそ、すごいことじゃないか！
どこにあるんだい？案内してくれよ！」

「いや、あの、その...。」

ホノラは、自分から言いだした手前
「一人で行ってくれ」とは言えません。

仕方なく、一緒に行くことにしました。

【Scene.7】旅路

ダルガ峰は険しい山です。
その頂上の近く、断崖絶壁に、その木は生えています。

予想に反して、旅は順調そのもの。

マッフィーの冒険譚を聞きながら、
二人は進んでいきます。

頂上に着くと、たしかにあります。
見たことのない実が、たわわに成った木が！

「本当にあった！あれが“とんでもなく美味しい実”か！
いや～、ここまで一生懸命に歩いた甲斐があったなあ～。」

マッフィーは、汗をぬぐいながら満足顔です。

「いや、までよ。

このくらいの道であれば、どうしてジョーンズたちは、
たどり着くことができなかったんだ...？」

ホノラが呟いた、そのときです。
あたりが急に、白い霧に包まれました。

見渡す限り、真っ白。
なんにも見えません。

「おーい、マッフィー！どこに居るんだー！」

ホノラが大きな声で呼びかけると、
白い霧の向こうから、影が近づいてきました。

「ああ、マッフィー！よかった。
はぐれちゃったのかと思ったよ」

ホノラが、安堵のため息をついた、そのときでした。

【Scene.8】過去との戦い

その影がブワッと大きく立ち上がったかと思うと、急に襲い掛かってきました。

「うわあ！あつぶないなあ！何するんだ！」

見ると、その影はマッフィーではありません。大きなマフラーを顔に巻いた恐ろしい猫です。

「ウバウ...タオス...。
ツヨイ...エライ...。」

ブツブツと呟きながら、その猫はギラリと光る爪で襲い掛かってきます。

「おい！やめてくれ！」

「ウバウ...ウバワレル...。
ソレガ...スベテ...。」

マフラーの隙間から見える目は、釣り上がり、赤く煌めいています。

「ダメだ...戦うしかない...。」

何で、僕ばかり。
いつも戦わなくちゃいけないんだ。

誰も傷つけないのに！」

キッと相手を睨みつけ、ホノラが爪を振り上げた、そのときです。

いつかのマッフィーの言葉が頭をよぎりました。

「自分が“どう在るか”が大事なんだ。
自分の在り方次第で、世界は楽しくも悲しくもなる。」

ホノラは我に返ると、目の前の猫をしっかりと見つめました。

ただ“恐ろしい姿”だと思っていたその猫は、悲しく、辛そうな顔をしています。

「この猫は...。
僕だ...！僕自身だ！」

よく見ると、その猫はホノラそっくりの姿をしているのでした。

ホノラはゆっくりと歩み寄ると、
そっと猫を抱きしめました。

「今まで、ちゃんと見つめることができなくて、ごめん。
痛みも、辛さも、怖さも、全部ふくめて僕なんだ。
“これまで”の全てがあるから、“いまの僕”があるんだ。」

猫の全身からふっと力が抜けたと思うと、
光の粒が舞い上がり、跡形もなく消えてしまいました。

【Scene.9】強さとは

ゆっくりと白い霧が晴れていきます。

「たすかった...。」

ホノラが安堵のあまり地面にへたりこむと、

「どうやら“勝った”みたいだね。」

マッフィーが笑顔で立っていました。

「これは、いったい...」

「フッフッフオ。これは珍しい。
勝ちおったわい。」

声のする方を見ると、狐の仙人が立っています。

「強きものよ、実を持っていくがよい。」

「強い？ 僕が？」

僕は弱いよ...。
さっきだって結局、戦うことができなかった。」

「“強さ”とは、“力の強さ”だけではない。
ここで試されるのは“心の強さ”じゃ。

力が強いだけの者は決して、
この試練を突破することはできん。」

「心の、強さ...？」

「“弱さ”を認め、受け入れること。
それが“心の強さ”なのじゃよ。

ホノラといったな。お前は“強い”。
ここまで生きた自分を、もっと褒めてやりなさい。」

ホノラは何だか心があつたかくて、むずむずして、
涙をこらえるしかありませんでした。

「ホノラ、何で変な顔してんの？」

マッフィーの言葉に、みんな大笑いするのです。

【Scene.10】プレゼント

無事に“とんでもなく美味しい実”を手に入れたホノラは、意気揚々と「猫集会」へやってきました。

「ほら、これが“とんでもなく美味しい実”だよ！」

周囲の猫たちが、色めき立ちます。

「ホノラが“あの実”を採ってきたぞ！
ジョーンズだって、できなかったのに！」

狐の仙人の試練を乗り越えたホノラは、今までのホノラとは、ちょっと違います。

ざわめく猫たちをかき分けて、まっすぐにエレノアのもとへと進んでいきます。

「エレノア、これ、プレゼント。」

「ありがとう。」

エレノアはホノラをチラと見ると、それだけ言って、ふいっと顔を反らしてしまいました。

「エレノア、僕は...。」

「私は、私だけを愛して欲しいの。
でも、私だけしか見てない猫は、嫌なの。」

他の全てを愛しながら、
私だけを愛して欲しいのよ。」

「え、それって、どういう...」

それだけ言うと、
エレノアは去って行ってしまいました。

【Scene.11】光と影

“とんでもなく美味しい実”を持ち帰ったことをきっかけに、
ホノラの周りには猫たちが集まるようになりました。

もう「弱虫」と言われることもありません。
ホノラは、はじめて「猫集会」が楽しい時間に思えました。

この気持ちをマッフィーにも聞いて欲しい！

ホノラは温かい気持ちを胸に、
いつもの祠へと向かいました。

いつのまにかホノラも
祠に祈ることが日課になっていたのです。

さて、ホノラが去った猫たちの秘密の場所では、
悔しそうな顔をしている猫が一匹。

「ホノラのやつ、調子に乗りやがって！
オレが、あいつより“弱い”っていうのか！」

あの“弱虫ホノラ”が周囲に受け入れられることが、
ジョーンズには許せません。

「そんなはずはない！
ホノラのやつ、何かズルをしているに決まっている！」

そこに通りかかったのは、お調子もののミャオ。

「そういえば。」

ミャオが思い出したように話しはじめます。

「ホノラって最近、いつも祠でお祈りしてるよね。
そういえば、ホノラが変わったのって、
お祈りするようになってからだったかも。」

「なあに～？
どこだ、その場所は！オレに教えろ！」

「お、教えるよ！落ち着いて！」

「ホノラのやつ、やっぱりズルをしてやがったか。
オレが化けの皮を剥いでやる。待ってろよ～。フハハハハ。」

ミャオから祠の場所を聞いたジョーンズは、
夜中にこっそりと、祠へ向かいました。

そして夜が明けないうちに、
祠をめちゃくちゃに壊してしまいました。

【Scene.12】代償

朝、ホノラがいつもの祠へ行くと、
マッフィーが呆然と立ち尽くしています。

「おはよう、マッフィー！
どうしたの？」

見ると、祠がめちゃくちゃに壊されています。
花はちぎられ、お供えの木の実は食べ荒らされていました。

「ひどい。誰がこんなことを...。」

つぶやくホノラの横で、マッフィーが深刻な顔をしています。

「いけない...。
これじゃあ、みんなが大変なことになる！」

マッフィーが叫んだ、そのとき。

祠が赤く光ったかと思うと、
黒いけむりがモクモクと立ち上りはじめました。

その煙は空を厚く覆い、
世界は真っ暗に閉ざされてしまいました。

暗く垂れ込める空からは、雪が降ってきます。
凍えるような寒さです。

「これは...。いったい、何がどうなって...。」

ホノラは、ただ驚くばかり。
すると、マッフィーが静かに言いました。

「“自然”と“動物”の繋がりが絶たれてしまったんだ。
僕らはもう、十分な食べ物を得ることができない...。」

その日から、本当に食べ物が採れなくなりました。

いつもは、森の中に、たくさんの食べ物があつたのです。

それが、この日を境に、
ぱったりと採れなくなってしまいました。

百年の森林(もり)に暮らす動物たちはみんな、
お腹を空かせて、困り果ててしまいました。

「こ、こんなつもりじゃなかったんだ！こんなつもりじゃ。
オレは、ただ...。」

ジョーンズが大きな声で叫んでいます。
でも、もう後の祭りです。

森林(もり)はもう、
食べ物を与えてはくれません。

「どうすればいいんだろう…。

そうだ！
狐の仙人さまなら、何かわかるかもしれない！」

ホノラは猫集会を飛び出すと、マッフィーと合流し、
二人でダルガ峰へと向かいました。

【Scene.13】祈り花

「来たか。」

狐の仙人は、
深刻な顔をして二人を迎えました。

ホノラは狐の仙人に尋ねます。

「仙人さま、森林(もり)で食べ物が採れなくなっていました。
このままでは動物たちは皆、飢えて死んでしまいます。」

森林(もり)との関係を取り戻すには、
いったい、どうしたらいいんでしょうか。」

「一旦、絶たれた関係を取り戻すのは、簡単なことではない。
それには、特別な花が必要での...。」

「その花があればいいんだね！
僕たちが採ってくるよ！」

マッフィーが勢いよく答えました。

「そう簡単ではないじゃ。
それは百年の森林の奥、原生の森にあってな。」

あまりに陰しい山じゃ。
それに、この雪では、山奥は猛吹雪じゃろう。

わしら動物には、あまりにも過酷な環境じゃ。」

「それでも行くよ！
誰かが採ってこないと、みんなが死んじゃう！
そんなの、僕は嫌だ！」

ホノラの強い言葉に、マッフィーも頷きます。

「僕たちは“強い”からね！
二人一緒なら、超えられないものなんて、何もないさ！」

「そうか。二人とも、頼んだぞ。」

原生林の奥地に太古から生きる「マグノリアの大木」がある。
その花を持ち帰り、祠に捧げるのじゃ。」

【Scene.14】吹雪

百年の森林(もり)の奥地、原生の森は、
1m先も見えないほどの猛吹雪です。

自分がどちらの方向に進んでいるのかさえ、わかりません。

仙人さまがくれた「萤火の灯り」がなければ、
とっくに迷子になっていたでしょう。

「萤火の灯り」は決して消えることのない火。
炎は目的地の方向を指して、燃え続けてくれます。

どれだけの時間が経ったでしょう。

歩き続けるうちに、
身体は冷え、
だんだんと意識が朦朧としてきました。

自分が、
歩いているのか、
止まっているのかさえ、
わかりません。

目の前がぼや～っとしてきて、
何だか眠くなってきました。

「何だか、気持ちがいいなあ～。
このまま、寝ちゃおうかなあ…。

なあ、マッフィー。君もそう思わないかい？」

ホノラが、そう呟いたとき。

ドサっ！

大きな音にハッと振り向くと、
マッフィーが倒れています。

「マッフィー！おい、マッフィー！寝ちゃダメだ！」
おい、マッフィー！目を覚ましてくれ！」

マッフィーは、ホノラよりも、ずっと小さな生き物です。
寒さに凍え、動けなくなってしまいました。

「マッフィー、君の方が僕よりずっと小さい存在なのに。
いつも僕は君を頼ってばかりだった。ごめん！」

ホノラはなんとかマッフィーを背負うと、
力強く歩きはじめました。

「僕がなんとかするから。
マッフィー、君を助けるから！」

【Scene.15】自由へ

ホノラは大きな岩の影に洞穴(どうくつ)を見つけました。
ここなら、吹雪をしのぐことができます。

「ああ、よかった。これで助かる。」

安心したのも束の間。
マッフィーは一向に動きません。

体温が下がりすぎて、動けないのです。
このままでは危険です。

「おい、マッフィー、しっかりしてくれ！
こんなとき、どうすればいいんだよ。」

僕は何て弱いんだ。
肝心なときに、友を救えないなんて！」

叫んだホノラの声に「萤火の灯り」がゆらゆらと揺れています。
壁に映し出された影が、不安そうに動きました。

「どうにかして、マッフィーを温めないで。
でも、こんな吹雪の中で、どうすれば…」

ホノラはハッと気づきました。

「このマフラー…！」

ホノラのマフラーは
生まれたときからずっと一緒に居た、
唯一の相棒です。

どんなにいじめられても、馬鹿にされても、
このマフラーだけは守ってきました。

ホノラは首からマフラーを取ると、
萤火にかざしました。

最初はチリチリと、
そしてメラメラとマフラーが燃えていきます。

「マッフィー、生きてくれ！
また一緒に、冒険しよう！
僕には君が、必要なんだ！」

【Scene.16】目覚め

どれだけの時間が経ったのでしょうか。

疲れて眠ってしまっていたホノラが目を開くと、
外の吹雪がやんでいます。

「そうだ！ マッフィーは！」

マッフィーは元の場所に横たわったまま、ぴくりとも動きません。

「マッフィー…。ごめん。僕…！」

「ん…。おはようホノラ。
今日はどこに冒険に行こうか？」

「マッフィー！！ 君ってやつは…！
よかった！ 本当に、よかった！」

あんまり大声でホノラが泣くものだから、
洞穴に声が反響して、ウワンウワンと鳴っています。

「ホノラ、いったいどうしたんだよ。
それに君、マフラーはどうしたんだい？
大事なものだっただろう。」

「ああ、マフラーはね。もういいんだ。
大事な人にあげてきた。僕にはもう、必要ない。」

「そうか。」

なんだかスッキリした顔をしているホノラを見て、
マッフィーはそれ以上、尋ねることをやめました。

「ところで、いったいココはどこなんだい？
マグノリアの大木は、どっちにあるんだろう。」

二人が「蛍火の灯り」を見ると、
火はまっすぐに燃えています。

「なあホノラ、この火って、
マグノリアの大木の方を指して燃えるんだよな。」

「と、いうことは…！」

二人は急いで洞穴から外に飛び出しました。

【Scene.17】マグノリアの花

大岩の上を見上げると、
そこには見たこともない大きな木がそびえ立っています。

雲の隙間から差し込む光に照らされて、
花々がキラキラと輝いています。

「なんて綺麗なんだ...」

二人が見惚れていると、
風に運ばれて、何かがマッフィーの顔を覆いました。

「ぶわ！何だこりゃ。
ん？これは...マフラー？」

見ると、ホノラのマフラーの切れ端です。

「ちょうどいい。
これを、こうして...」

マッフィーは切れ端を二つにちぎると、
ひとつを腕に巻きつけました。

もうひとつをホノラに差し出して、こう言います。

「これでお揃い！仲間の証さ。
いつまでも一緒に、冒険をしよう！なあ、相棒！」

ホノラは何か言おうとしましたが、
気持ちが喉につっかえて、うまく出てきません。

ただただ、頷くばかりでした。

【Scene.18】愛を捧げて

ホノラとマッフィーの2人はマグノリアの花を大切に持ち帰り、
祠へと捧げました。

壊れた祠は、ジョーンズたちが
元通りに直してくれていました。

花を捧げ、森林(もり)の動物みんなで祈りを捧げると、
祠が青白く輝き、光の柱が空を貫きます。

黒くたちこめた雲が晴れ渡っていきます。

森も、空も、輝きを取り戻し、
花々が、色とりどりの花びらの色を競うかのように
一面に咲き誇りました。

その周りを、
蜂たちが嬉しそうに飛び回っています。

「これで、大丈夫。」

マッフィーとホノラはお互いに頷きました。

ホノラはマグノリアの花を手に、
エレノアの元へと向かいました。

「僕は、共に生きる友を、自然を、愛している。
そして、君も。

僕と一緒に、生きてくれないか。」

マグノリアの花を渡すと、エレノアは少し考えてから、答えました。

「ええ。喜んで。」

わっと動物たちの声が響きます。
自然の恵みを、そして二人の関係を祝う宴の音が、
いつまでも、いつまでも、百年の森林(もり)に響いていました。

『Norah』2022.3

Author:Shin Kozuka

Copyright © reml behn, A-zero.inc